平成24年度「まちづくり講演会」 講演録

「できない」を「できる！」に変える企画力・実現力
～地域を変えるチカラとは？～

講師　木 村 俊 昭（きむらとしあき）

北海道出身。1984 年小樽市入庁。産業振興課長、企画政策室主幹（プロジェクト担当）、産業港湾部副参事。2006 年から内閣官房・内閣府企画官（地域活性化担当）として地域再生策の策定、地域再生制度の事前・事後評価、全国大学での地域活性化システム論講座の開講、政府広報活動のほか、地域再生に関する調査研究を担当。2009 年から農林水産大臣官房企画官として、地域の担い手の育成、広域ビジネスの創出、地域と大学との連携、農商工連携、6 次産業化などを担当。

現在は、内閣官房　地域活性化伝道師、東京農業大学客員教授、地域活性学会理事（広報交流委員長）等として全国各地で講演・現地アドバイスを実施中。公益社団法人日本青年会議所アドバイザー・地域プロデューサー育成塾塾長、スーパー公務員塾塾長も務める。

ご紹介ありがとうございます。本日は初めての方と初めてでない方がおられると思います。いまご紹介がありました内閣官房の地域活性化統合事務局で企画官をしていましたときは、私が北海道生まれで、北海道育ちなんですけど、九州・沖縄を担当させていただいてましたんで、かなり九州に来る機会というのは多かったわけです。

今日は、私は自宅がいま北海道の小樽市にありまして、今日は小樽市から朝の便でこちらに、昼過ぎの13時30分に福岡空港に着きまして、その後、こちらの筑後市の方に車で来させていただいて、そこから3ケ所すでに視察させていただきました。明日の午前中も、また筑後市の中を視察させていただければと考えております。全国各地一年間で150ケ所ぐらいを回っています。どれくらい名刺交換をされるんですかって聞かれるんですが、5千人を超えていますですね。数万人の方とお会いしています。

その中で、いつも実感として感じていることを今日は、なかなか時間がありませんから、今日は3時間も4時間も5時間もやるわけではありませんので、限られた時間でありますけど、お付き合いいただけたらと考えております。

そこの中で、今日は最初にポイントをお話をしたいと思います。

私は全国各地を回っていく中で、いろんな方々から、今日はいま控室にいたときも全国の2ケ所から依頼が来ていまして、それを今ちょっと対応していたんですが、一つは黒部ダムのある黒部市ですか。その地域でどのように今後対応していけばいいのか、皆様方が常日頃から考えている人づくり、いわゆるどのように自分たちのことを後継者、あとを継いでくれる方々を含めて、また、地域の中ではどうしても雇用を生まなければ、仕事を生んでいかなければ、なかなか本当にここに住みたいよと言っている子どもや孫たちが実は住めないという状況になる。

それは1千万や2千万、1億円あった方がいいのかもしれませんが、少なくともこのくらいの所

得は、売り上げは確保したいですよねというところがあると思います。そこを実現するためにどうしていったらいいんだろうというところを私はお手伝いしています。

その中では各地域で呼ばれたり、講演で呼ばれたり、現地アドバイスで呼ばれたりしますが、そこでは、最初はある程度、ここの全体的な地域ではこういうことが起きています、そこん中で大切なポイントはなんでしょうか、こういうことではないでしょうか、考えてみませんかというところからスタートをしてその次には講演をして帰っています。

ときに皆様の4年間はどのように生きていく必要性があるか、そこで生活していく必要性があるかということを伝えます。

併せて私が学生のみなさんに話をするのは、「場は誰も作ってはくれない。」ひとつの「なぜ私はこういう環境にめぐまれないのか」とか、いろんなことの話をする学生がいます。いわゆる「場は誰も作ってくれないよ。」「本当は留学したかった。」「本当はこの大学でではない方がよかった」とか。「本当はこういうところに、地域に入ってこういうことをやってみたかった」とか。「全然声はかからないから、その場に接することができませんでした」と。

それは、誰も場なんてものは作ってくれないから、自ら進んでそこに挑戦をしていかないと、「できない理由」をいくら考えても「できないん」ですよ。天気が悪かかったとか、こういう環境だったからとか、今年は雨が多かったとか、いくらその理由を数えても考えても、できないんです。では出来る理由、「どのようにしたら出来るんだろう」ということをしっかり考えていこうと思います。そこの中で私は小学校のときに西興部村（にしおこっぺむら）で生まれて、その後遠軽町の小学校に入ったときです。上がり症でした。人前にでるとほっぺたが真っ赤になって、耳が熱くなるのがわかるんです。自宅では国語の本をすらすら読めるのに、授業になってあてられると読めないんです。これはまずいと思いまして。親からよく言われていたんです。父親、母親なら場を作ってあげられるけれども。あと、他人の人が、お前のために、じゃあ君のためにこういう場を作るよ、ということはなかなか言ってくれない。自ら自分でそこを克服しない限りは。結局は不得手になって、苦手になってしまう。そういうことで小学校に入ると、私は学級委員長に立候補したんですよ。そしたらですね皆さんはご経験があると思いますが、小学校入る前にロープで縛られて外を歩いていませんでした？、そういう人はいません？いませんですか。私は結構落ち着きがなかったんですよね。よく言うと活発なお子さんですね。すべて悪く言ったらだめですよ。それは活発なお子さんだったんですね、って言わないかんですよ。全部、マイナスに言ってはだめなんですね。これはプラスに。

皆さんが地域の中で、本当にがんばった人に対して、彼は恵まれていたんだとか、これはいい条件だったとか、いやあそこはああいうものがあるからできるんだとか。これは全部マイナスを言っていることになる。これはプラスに考えると。さすがだと、大したもんだと。ぜひそれをもっと伸ばして欲しいと言うと、お互いによく言っていただきましたと言うと、今度は相手方も、それよりもこれまでのあなたの取り組みは大したものですよとなるんですが。もう朝に会った時から、随分顔色が悪いけれども病気じゃないのとか、平気であいさつするんですよね、マイナスを。

それでよく聞くのが、うちの商売儲かんなくって、大変なんですって言うでしょう。で、一緒に商売やんないっていうんですよ。やんないですよ。お断りしますって。

こういう部分で大変苦労しているんですから、一緒に組んでもらえないだろうかとやる。プラス思考で考える。プラスで物事を考えませんと、すべてができない理由を考え始める。いやいや恵まれていたとか、たまたまそうだったとか、ツイてたなとか。

そこで、小学校に入る前に。この前、黒柳徹子さんにも言われたんですが、木村さん、ロープに縛られて、おばあちゃんにお寺に連れて行っていただいていたって聞いていますと。その道すがら祖母が言う言葉っていうのは一言なんですよ。行きも帰りも同じことしか言わないんです。3歳のときだったらよかったです。4歳になって5歳になると、「おばあちゃん行きのときも聞いたけどまた同じこと言っているよ」って言ってるんですね。それ、作戦なんですよ、祖母の。何なのかといいますと、「いいかい、人に頼まれたことは、気持ちよくやるんだよ。お母さんにお使いを頼まれたら気持ちよくやるんだよ。そうするとね、感謝されるんだよ。そうすると、自分でまたしっかりと、わかったと言って、やろうと言ってなるでしょう」って。

その祖母の娘の、私の母親。私と弟がいますが、言う言葉はずっと一言。同じことを言います。なんて言っていたかというと「お父さんがあなたがた二人を最も愛していますよ」と。これ繰り返しなんですね。やはり、いま考えると祖母の娘。しっかりと受け継いでいるんですね。

同じことを何度もしっかり、同じように一言を伝えたいことを繰り返している。たくさんのことを言っても、子供であればなかなか記憶に残らない。そこをしっかりと伝えようと。

私、父親を56歳に心筋梗塞で亡くした時に、私も弟もそこですぐ思ったことがあるんです。ものすごく大切に育てられたという想いです。

私は娘がいますが、娘を小さい時から、人に接した時には本当に一回きりだと思って接しなさいって。一期一会です。これを伝えてきました。いま娘は今年大学を出て、就職しましたが、好きな言葉を書いてくださいと誰かに言われると「一期一会」と書きます。これ私は別に強制してません。どんな言葉でもいい、自分の感じたことをそういうときは書けばいいよと。

そこで小学校、人前で話をするときにどうしても上がり症でした。自分の番があたると思うとドキドキする。これはなんとか改善していかないということで学級委員長になった。小学校に入りまして、椅子に座って授業を受けているんですが、ときどき立って歩いていたんですね。そしたら、担任の先生からは落ち着きのない子だと。私から見たら活発なお子さんと書いてくれればいいんですけど、内申書は常に落ち着きのない子どもって書かれるんですね。もっとプラスの面で見てくれればいいんですけど。

それで中学校・高校になりますと、数にあがるということに気付いたんですね。たくさんの人の前で、全校生徒の人の前で舞台に上がりますと、1200の頭がズラーっと整列しているんですね。もう、そこに圧倒されて、何をしゃべっていいのかわからなくなる。そこで、中学校も高校も生徒会に入って、生徒会長をしていました。そこで少しずつ改善されていきますね。

なんでこの話をしているかといいますと、その中学、高校の時に地域を回っていました。グループを作って生徒で地域を回っていました。この遠軽町の人口1万2千人の町は、酪農と林業のまちです。木工所がありました、当時7つ。7つの工場がありました、いまは1つになってます。そういう厳しい中で、商店街やいろんな方々に生徒会活動として話を聞いて言いました。そこでずっと同じように皆さんが言うのは「この町はダメだ。厳しい。」という言葉でした。じゃあ、どうしてなんだろうと。どうすればこの町を元気にできるんだろうか。まだ高校生でしたから、漠然と考えていました。それで何とかしないといけないと思って、私は遠軽町の役場を受験して、高校卒業すると同時に遠軽町の役場を受験して、町のために何とか元気にすることを手伝いたいなと思うようになりました。ところが当時、この北海道に212の市町村がありました。私が回ったことがある、私が行ったことがあるところは20です。

皆さんが今福岡県を全部回ったよと、これは何を言いたいのかというと、自分のまちが本当に良いのかダメなのかというのは、どれくらいのまちを、若しくは最も大切な自分のまちを「知り、気づいて」いるのか。大切な自分のまちを、本当に、歴史・文化を知り、気づいているんだろうか。そこを私は、どうなんだろうと。高校を卒業して就職するときに、まだ、北海道生まれ、北海道育ちと言いながら、10分の1しか見ていない。しかも、十分ではありません。1回行ったことがある程度で、これはまずいなということで、私は、いったん大学なり専門学校に行く必要があるなと、そしてその中で、もう一回北海道も含めて、全国も何とか回りたいと思い、大学に入り4年間全国各地を回ろうと、そしていろんなところを、いろんな人たちに会おうと、いうことを学生時代にやっていました。

娘が今年大学を卒業して就職をするときも、大学4年間、一年生のときから各経営者やいろんな方、農業者の方であったり、いろんな方々に大学一年生の時から名刺を持ってインタビューをさせています。できるだけ回って、できるだけいろんな方々に会って、自分の生まれ育ったところ。娘は小樽です。自分の生まれ育ったところが、どういうところか。漠然とではなくて、そこを知り、気づく。強み、弱み、気づく。

小学校の時には、そして中学校の時までは、歩いて学校に通ってました。そのときにマイナス20度、マイナス25度、吹雪にはなっていないのに、降り積もった雪が風で舞うんですね。地吹雪って言うんですが、そこを黙々と歩くんです。いやな思い出です。二度と体験したくないと小さい

時より思っていました。

ところが、他の雪の降らない、地吹雪を経験したことのない、その方々から見たら、知り、気づく。「ぜひそういう体験をしてみたいですね」と。いやあ私たちは子どもの頃からほっぺに刺さるくらいの寒さで、風で雪が舞って、前が見えないくらいになるんですよ。お客さんいい時期に来ましたねと。これ、観光の一つの目玉になっています。そう考えられないんですね、自分のまちを知り、気づいて、他のまちを比較できなければ、何も変わらない。「うちのまちなんにもない。いやよく来たね、でも何にもないんだわ」と。しかし、他の方から見たら、「いや、この筑後市は素晴らしいですね、こういう食べ物、食材があって、いや～いいですね」と。

先日、四国の高知市に呼ばれました。いま41万人ですが、44のコミュニティ、そこに民間の方がセンター長ということで、リーダーシップを発揮して、それぞれの44のコミュニティ、いわゆる町内会、行政、そこをしっかりと自分たちで話し合って、一体となって。「一緒になってやれることはなんだろう」と考えましょうと。私が呼ばれた日は土曜日、その日は高松市長がそのコミュニティ44の一生懸命取り組まれたところを表彰するという日でした。その日に、私はその後、表彰式の基調講演でした。そこで呼ばれたわけですけれども、前段で各センター長と意見交換をさせていただきました。そうすると高松出身ではない方もおられます。高松出身の方もおられます。これはすごくいいです。自分のまちはこうだと思ってますと言うと、だけどこういう良いとこもありますよね、と。こういうところをもっとよくすると、もっと住みやすいまちになりますよね、と。

コミュニティビジネスを興したいという方もありました。私はそのときに、いま大学でも地域ビジネス論というのがあり、地域でいかにビジネスを立ち上げるかという話があり、学問として教えていますが、実際には如何に所得水準・売上を上げるか、そこにどのように求められる人材を育成して定着していただくか、併せて一生懸命やったのに評価をされないんであれば、これは孫、息子、娘に後を継がせたいとは思わないね。一生懸命、汗を町のために流してれば、しっかりと評

価する。今日はその場です。大切だと思います。表彰状、感謝状は大切だと思います。それだけではありません、観光パンフレットに載る。私、月刊誌、いろんな雑誌に自分のページを持っていますが、かかわった町は必ずそこに載せさせていただいております。どんな取り組みをしているのか、これは評価の一つです。誇りと思える評価づくりにおいては、大切なこれは仕組みです。

今日は大変すばらしい日にお呼びいただいたことに感謝申し上げます。

知り、気づくということが大事で、私は大学に行って、実際にこの遠軽町に、その後戻ろうと思ったんですね。当然ですね、父親・母親いますし。当時まだ父親は生前で生きていましたので。そうすると、「大卒を採用しますか」と聞いたんですね。そしたらビックリしたんですけど、「いいえ大卒は採用しません」って言われるんですね。じゃあ、高校のときに入っとけばよかったかなと思ったんですけど、それは言ってもしょうがない。それはプラス思考ですから。そうするとすぐ聞かないといけないことがあるんですね。すぐ切り返さないといけないんですね。「高卒は募集するんですか？」って聞くんです。そうすると「高卒は募集します」って言うんですね、1名。そしたら私はすぐに言うんですね、「私、高卒です」って。それはそうですよね、大卒は高卒なんですから。そしたら「君は年を取りすぎている」って言われたんですね。いわゆる高校新卒者が欲しいということなんですね。

ここでごちゃごちゃやってても しょうがないですね。なので、私は先ほどご紹介がありましたが小樽市役所、よく遊びに行って、親戚もいて、小学校のときによくですね、ちょっと釣りに行ってくると言って、トントコ、トントコ汽車に乗って小樽まで行ってたんです、休みのときにですね。それでまた戻ってくるんですよ。「随分遅かったな」って言われるんですけど、小樽まで行っているんですよ。自分で釣り竿を持って行っているんですけど、それで小樽で釣りをして帰ってくるという

ことをしていましたので、小樽市に「募集しますか」と聞くと「募集します」と言うんです。「高卒も募集しますよ」と言うんです。「ありがとうございます」と言って、そうするとプラス思考ですから、すぐに聞かないといけなきゃいけないことがあるんですね。「何名募集するんですか」と聞くとこう言われたんですよ。「若干だ」と言うんです。参りましたね、「若干って何人ですか」って聞いたんですよ、人事担当者に。そしたらいきなり「若干は若干ですよ」って。何で怒られなきゃいけないのかわからないですけど。「何人くらい通るんですか」と聞いたら、「若干は若干だからいいだろう」と言うんですね。

これは何を言いたいかといいますと、この「若干名」が悪いとは言いませんが、判りやすく伝えないと伝わらないんですよね。皆さんたちはものすごく苦労していると思います。いろんな方に一緒になってやっていただきたい、と言った時に、こういう風に言ったらわかってくれるんじゃないかと言う事で、こういう風に説明したらいいんじゃないかと。

学生に、いま聖路加病院の日野原先生、1911年生まれ、明治44年生まれ、聖路加病院の日野原先生の本を読んだことがあるかなって。先生は全国の小学校70校に命の大切さを、101歳で70校。一生懸命40分間、立ったまま、子どもたちに命の大切さを説明してます。その日野原先生はよど号のハイジャックの時に乗っていました。大変つらい思いをされている先生でもあります、って言ったら質問が出たんです、学生から。

「先生」「はい？何」、授業中は質問していいと言っていますから私は、「先生そのよど号というのはどのくらいの大きさの船なんですか？」と聞くんです。そうですよね、私は分かっているんです。ところが学生は分かっていないんです。自分は分かっているからその表現を出すんですけれども、よど号、当然のように飛行機だろうとわかっているんです。ところが、聞く相手はわからないんですね。となると、あの飛行機のよど号に乗っていた先生ですよ、と。大変つらい思いをされてありました、ということを言わないといけない。何度言って説明をしても何故わからないんだと。歴史的建造物を「歴建」、北海道の苫小牧東部を「苫東」、苫東地域における歴建を「苫東の歴建（とまとのれきけん）」と、わかっているから言えるんです。全く何を言っているかわからない。今日は何を言ってたのか全然わからなかったんです。それを何度も繰り返すんですね。説明会の中で。わからないんです。こんなに説明しているのに何でわからないんですかと。知り、気づいた後に一体感を持つには説明する必要性があるのですが、そこに最新の注意を払う必要性があるのですが、「当然だろうそんなこと、言うまでもない。当たり前だ」と。知っているのが当たり前だと。

本当にそうだろうか、すべてそれぞれの人がすべての事を本当に把握しているのかというとそうではありません。得意分野もあるし、不得意分野もある。そこをしっかり考える必要がありますよね、ということです。

そこでこの「若干名」ということで、私は小樽出身ではありませんから。一次試験を受けまして、二次試験。びっくりしましたね、二次試験に行ったときにジャージを持ってこいって言うんですよ。それで、ジャージに着替えなさいって言うんですよ。それで着替えたら体力テストがあったんですよ。反復横跳びとか垂直跳びとか、腹筋60秒で何回できるとか。当然のように地元出身じゃないですから、ここに何としても入りたいと思っているもんですから、必死になってやったんですよ。

60秒間に何回腹筋できるかと言ったら70くらいやりましたね。もう必死になってやる。そうしたら今度はジャージに着替えて、スーツでもいいですと。次の面接をする準備をしてくださいと。そして面接会場に案内されます。面接会場に行って、「はいどうぞ、ノックをして入ってください」と言われて、トントントンと叩いて、失礼しますと入ったら、もう息切れをしているんです。そしたら面接官がいきなり「病気ですか？」って聞くんです。「いや違います」って、「いま体力テストがあったんです」って話したら、「いやわかってますけど、随分息が荒いですね」って。これは何を言いたいかと言いますと、前年も体力テストを行った後、面接をやってるから、別に何が問題あるか考えてみましたら、私は第2次面接会場に行ってくださいと言われたときに、その人事担当者に「木村さん、あれは一定ラインになってればいいですよ」って。「それは最初に言ってください」って、それは聞きたくなかったですって。それで「なんで逆にしないんですか」って聞いたら「いや去年もやってますから」って、おもしろいですよね。

ここでいま言いたかったのは、去年もやってるからいいじゃないかと。去年もこれでやったからいいじゃないかと。本当にそうなんですかと。もう一回みんなで考えてみませんかと。いわゆる、しっかりと去年のよかったところと、反省すべきところとはなんなんだということをしなくちゃならない。市役所に入る前からそういうことを考えていました。市役所というのは市民の役に立つところという意味ですからね。おわかりですよね、役に立たないところじゃないですよね。市民の皆さんに役に立つところなんですからね。そうすると、誰の立場で考えるかと言うと行政の立場で考えればいいんですよね。市民の皆さんの立場で考える。

さっき地域ビジネスの話をしました。地域ビジネスの成功って何ですか？

これはもうお分かりの方はいると思います。成功の秘訣は何かと言いますと、作れるものを作っても売れないんですよね。これは、こういうことなんですよ「お客様に言い訳を考えられるか」。なぜ筑後市に行くんですかと言われたときに「なんとなく」と言ったら、これはビジネスにはならない

ですよね。「なぜあの道の駅に行くんですか」と聞いた時に「できたから」「新しくできたから」と言ったら、これは理由にならないです。「いや、ここの温泉はこういう効能がある」、ここで言うと、有馬温泉は湯が途絶えましたもんね。あと一つ、別のちょっと濁りのようなのはありますけどね。これも枯渇するんじゃないかと厳しい状況で、しっかり皆さん方は一体感を持って。その温泉、炭酸の入っている温泉が出ていますもんね。こういう効能で、冷泉ですよね。そりゃそうですよね、高温でしたら無理ですもんね。炭酸ですから。なら、それの説明をしっかりしないといけないですよね。でないと来てくれないですよね。いわゆる、お客様はなんで来るんですか、と言ったら、「あそこはね、筑後のあの温泉は冷泉で、しっかりと炭酸で、こういう効能があるんだよ。だから遠くたっていくんですよ。」という言い訳がなかったら、お客様に言える言い訳がなかったら、行かないですよ。いやいや、海があります、山があります、川があります、きれいな花が咲いていますとか。それは他でも咲いているでしょうと。他にも山はあるよと。「いやいや空気がある。空気がおいしいんだ。」と言うと、「いや他にも空気のおいしいところはあるよ」と。「他でもおいしいよ、空気」って。これは言い訳になんないですよ。ということを考えてないといけない。

そこで、私の生まれた町をご紹介しますと、この興部村。これ鹿がめっぽう増えてます。人口が1200人でしょ。鹿は数万頭いますからね。そうするともうお分かりですよね、人が鹿を見かけるんです。また鹿がいた、畑を荒らされると困るなと。これ大変だな、また木をかじるんじゃないかと。干ばつできれいにしているのに、いやあ困ったなと言って鹿を追いかけるんです。ところが鹿が人間を見かけることは少ないんです。いやいや久しぶりに人間見たなと。これをどうするかということを考えるときに、皆さんできない理由を考えると、予算がないから鹿を駆除するのは難しい、猟友会の方も高齢化が進んでいる。人出をそこまで裂けない。1200人の村だから役場の職員も少ない。みんな大変だと考えているんですね、それでどうするか。この名寄から興部町には、JR、いわゆる鉄道がありません。そうすると車で走るしかない。そうすると鹿がどんどん増えていますから、飛び出してくるんですね。群れを成して。これ制限速度を守って走ったとしましても、ものすごく危ないですよ。いきなり横切ってくる。もう止めようもない、ドンっと寄ってくる。すると車が大破します。いたるところから出てきます。これはいやいやしょうがない、予算もないですし、国が何とかしてくれないと、北海道庁が何とかしてくれないと。何が悪い、あれが悪いと言っても何もかわりません。いくら言っても鹿は減りません。少なくとも看板を立てようと。鹿が出たところは看板を立てるんです。「鹿注意」という看板を立てるんです。鹿に注意しなさいって。ここから鹿が出たよ、と注意しなさいって。これ減らないんですよ。いくら看板をたくさん作っても鹿は減らないんです。

もう、言っている意味は解りますよね。これ、なんら対策に至ってない。危険だから注意しろと、そうしたら考えないといけないですよね。私たちは考えないといけない。

自分たちでやるには「予算がない」「人手がない」、いくら言ったって解決しません。だったらこの村離れるかという話になっちゃう。いや、こんなにみんなで一生懸命支えてきた村なんだから、一緒に住もうよと考えたときになんとかしないと、畑は荒らすし、大変です。となると考えるわけです。それだったら、しっかりと役割分担をしようと。自分たちが何ができるかという情報を共有して、私は何が得意です、今日お集まりの皆さんが、私は何が得意です、私はこれをしっかり実行して

きました、こういう経験、ノウハウは持っています。私はこういうことができるよといった情報共有をして、そこで何でもかんでも一人で、自分一人で、自分たちだけで、自分たちの地域だけでやろうとするだけではなくて、役割分担をしないとこれは無理だろうなと。ここで言うと、だって予算がないもん、人手がないもん、だからできないんです。で終わっちゃう。できない理由を考えてしまう。

そこで施設を作ろうと、そんなに立派ではありません、宿泊施設を作ろうと、泊まっていただくんです、一泊2食で。夕食・朝食で8千円ですって。一泊2食で6千円ですっていう施設を作ろう、泊まっていただく施設を作ろうと。

北海道と沖縄はスギの花粉症はないんです。スギ植えていませんから、ほんの一部のところに植えてはいますけど。スギ花粉症ないです。そういった方々に泊まっていただこうと。それでその施設を作って、もうどうするかお分かりですね。自分たちで鹿を駆除する予算はありません。猟友会の方も高齢化が進んでいます。であれば、猟友会一人ひとりの方に案内をしていただいて、鹿を駆除する方に泊まっていただく。20人～30人、全国から鹿を駆除に来ませんか、鹿を射ちにきませんか、と。自分たちだけでやると、とても手に負えない、予算もない、人手もない。じゃあ来ていただけませんか、と。

全国からお医者さんであったり、大学の西野さんであったり、いろいろな方々がじゃあ泊まろうかと。スギ花粉もないですよと。お客さんへの言い訳です。スギ花粉症になった方についてはご存じだと思いますが、一回なったら目が痒くなって、ゼイゼイ言って、夜寝れなくて、顔がはれて、なんとか早くこの時期が過ぎてくれないかと。3泊4日にして北海道にいますと、2泊目くらいでスーっと引いてきます。そして、3泊なり4泊が過ぎると帰ってから1～2ケ月持ちます。これがお客様に対する言い訳です。「だから行くんだ」と。何も別に鹿打ちだけではない。となると今度は、ご家族の方一緒に来たらいかがですかと。来ていただきます。気になるのは、1泊2食で8千円と6

千円でどう違うんだと。ここは海はありません、山間のまちです。山間の村です。となると料理が違います。北海道、私、北海道生まれの北海道育ちですけど、全国各地に行ったときに、「いや木村さん、こないだ北海道行ってきましたよ。3泊4日、いや～食べ物がよかった。最初にオホーツク海の近くに泊まりました。いや海の幸がおいしかった。刺身、てんぷら、毛カニ、いや～よかった。」、「ありがとうございます」、「次に、山間の旭川の近くの温泉宿に泊まりました。いや～、料理がよかった。刺身、てんぷら、毛カニ、よかった。」、最終日、3泊目「せっかく来たんだから、札幌に泊まって小樽をちょっと見た後に、札幌で夕食を食べた。いや～木村さん、料理がよかった、刺身、てんぷら、毛カニ」こう言われたんですね。

だから、1泊2食の8千円、6千円の違いは刺身、てんぷら、毛カニかと思いますが、違います。もうお気づきでしょう？違います、料理は料理でも、それではありません。何かと言うと、山菜料理と併せて、あなたがドンっと打った鹿を食べていただきます。それで2千円アップ、これは得したような。よくよく考えると「えっ」って思うんですけど、そうかと、それ食べるのかと。こちらから見ると、おい、これ打った鹿はどうするんだと。いや食べてもらえばいいんだよ。食べていただいて8千円と。

私も泊まったんですよ。生まれたところですから、おいでよって言われていったんですよね。行ったらですね、すかさずすぐ村長さんとか皆さんが集まってきて、私も一緒になって、役場の皆さんや猟友会の会長さんとか皆さん集まりになられてですね。それで意見交換をしましょうということで、15時からです。意見交換をしましょう、と言って、着いたとたんに意見交換が始まったんですね。いきなり出てきたんです。何がでてきたかと言うと、どんぶりもんがでてきたんですね。いや、3時のおやつにしては重たいなと思って。ご飯の上に肉らしきものが

乗っかってるんですね。もうおわかりでしょう？鹿肉どんぶりですよ。これ3時に食べるのは結構重たいなと思ったんですけれども、食べてくださいってですね。その村長さんという方がユニークな方で「村長ラーメン」とか、ラーメンですね。村長のラーメンとか、村長うどんとか、村長のなにがしとかユニークだから作っている。もう大体味はわかるでしょう？「食べますか」って言われたら「いいえ、結構です」と言って、鹿肉丼を食べてるんです。小さいころからしつけられていて、残すのは失礼だということでこう食べるんです（食べる仕草）。そして、おなか一杯になったな～、っと思いながら。そしたら村長さんが私に紙を一枚くれるんですよ。「え、この紙なんですか？」って、なんとなくピンと来るんですけど、一応聞くんですね。「この紙なんですか」って聞いたら、「木村さんがこの施設のレストランでこの鹿肉どんぶりを出すとしたら、どれくらいの値段にしますか？」って。全国各地を回っていろんなものを食べていますし、いろんな値段もわかっているでしょうから、答えてくださいということなんで。いやあ、ワンコイン500円では失礼だと、それも苦労して、一生懸命みんなで考えながらですよ。しっかりと考えてやっている以上はワンコイン500円では失礼だと。500円では安すぎるだろう。850円まではもらえるかもしれないですけど。そのストーリー、「何故あなたはこの鹿肉丼を食べたんですか」という言い訳。こういう形でみんなで役割分担をして、こういう仕組みを作ってやっている。だから、ここで鹿肉丼を食べたんだと。となれば850円くらいはいいんじゃないですかねって、村長さんにその紙を渡したんですよ。そしたら村長さんはなんて言ったと思います？「紙はいらない。850円くれ」って言われたんですよ。私はてっきり、食べてみろと言われるから食べたんですけど、自分の書いた値段を書いて取られるなら、これで合計8，850円払ったんですよ。まあ、細かいことはいいですけど、1泊2食で。1泊2食で行っているもんですから、この後すぐ夕食だと言わないだろうなと思っていたら、ここで話し合いをして17時くらい近くになったんですね。16時半すぎ。そうすると「木村さん、夕食にしますか」って言われたんですよ。「食べたばかりだから食べれません。ちょっと散歩か何かしないと」と言ったら、「わかりました、森に行きましょう」って。そして森に行ったんです。そしたら、木が茂ってまして、そこに役場の職員が一人いるんですよ。「木村さん、こちらです」って言うんですね。よくよく見ると、私もいろいろ観察力があるんで。よく見ると、枝とか木に赤い線が入っているんですね。赤い線が。それで「集まってくださーい」って言われるんで、私以外に誰を集めているんだろって思ってたら、大学の農学部の林業学科、その学生たちなんです。ゼミ合宿で泊まってるんです。1泊2食で5千円だったり、ときには6千円になりますけど泊まっていただいてるそうです。そして、その学生を集めるんですね。「はい、集まってください」って言われて私も立ってるんですね。そこで言った言葉というのが、「それではこれから見本を示します。」と役場の職員がですよ。それで何かと言うと「この赤い印のついた木は、このように切ってください。この枝はこのようにはらってください」と。私は黙って見ていたんですよ。「では木村さんどうぞ」と道具を渡されているんですよ。私も役割分担の一部になっちゃって、そこに初めて気づいたんですよ。それで、「はいスタートしてください」って言うんですね。それでこの枝はどうするんだろうと思ってたら、「払った枝はそっちへ持っていってください」って言うんですね。それで私も持って行っているんですよ。これでもうお分かりですよね。

間伐するのにお金がない、人手がない、といろんなことを言う人はいっぱいいる。「できない」

をたくさん言う人はいる。じゃあ、どうするの。「だからできないで良いじゃないか」、とはならないわけなんですよ。となると、自分達でできないところは、しっかりとお手伝いしたらいい、楽しんでいる。ここで大事なのは、皆さん方がいま地域でしっかりとやってるときもそうですが、楽しくないと続かないと。「うわ、これ面白いね」こういう風にやって、そしてまた一緒にやって、次の年も泊まりに来てくれる。体験に来てくれる。という形を取っている。

如何にこれ「人のため」って書いて、「あなたのためだから」とこれ偽りですね。自分のためになる、自分がワクワクする。学生にもよく伝えるんですが。何かと言いますと、本業は、本来の業務は、仕事と人生である。本業の自分のやってきた仕事が定年退職を迎える。本業が仕事だけであれば、定年退職を迎えたときに「さあ明日から何やろう」となります。そうすると本業における人生というのは、「これやっているとワクワクするんですよね。子どもたちに読み聞かせをやっているとワクワクするんですよね。自分もモチベーションが上がるんですよね。高まるんですよね」そう言う。「私は釣りをやっていると、そして釣りのやり方を教えているとワクワクするんですよね。」、「私は演劇をやっていると、舞台に立っているとワクワクするんですよね。」という、本業に仕事と人生があって、そこをしっかりと学生に伝えていくんですが、学生たちにはそこを学んでいく場を作ってやる。

そこで、この間伐も終わりまして、さあ戻りましょうかとなって。では早速夕食ですとなって、夕食。また囲んで一緒になって夕食を食べるんですね。夕食を食べて20時すぎくらいになると、村長さんたちがいきなり、その後、「木村さん、スナックに行かないか？」と言うんです。びっくりしましたね、もうお分かりですよね。こんな1200人の村、ですから鹿スナックとかあるのかと。若しくはですよ、もうお分かりと思いますが、村長スナックというのがあるのかと思ったり、もう突然、頭の中がいろいろ考えるんですけど、上着を脱いでご飯を食べてましたから、そうですかと言って上着を着ようとたら、「いや木村さん何をやっているんだ」と、「上着はいいと、持ったままで」これで

もう分かりますよね。これは施設の中だと、施設の中にあるんだと。それで廊下を歩きますと、突き当りのところにあるんです。そしたらピンと皆さんきません。私もこれ歩いているときにピンと来たんですね。村長スナックじゃないかということと併せて、その通りでした。ガチャって開けました。私がガチャって開けましたら、さっきご飯をよそってくれたお母さんが「いらっしゃい」って言うんですよね。「さっき会いましたよね」って言いましたら、「さっきご飯をよそったのは私です。覚えてました？」って。「覚えてますよ」って直前まで一緒だったんですから覚えていますよって。「今日は飲んで歌って2千円ぽっきりですから」って。「いやもう、飲んでも歌いも、歌い放題と言われてもそんなに歌わないですよ」って、まあ、いいんですけど。それで気づいたんですが、8千円プラス、2千円プラス、850円プラスって。まあいいんですけど、生まれたところですから。そこで聞いた言葉というのは、もうお分かりだと思いますが「この村ではどのように役割分担をしていますか」と聞いたら、私は料理が得意です、だから料理を、皆さんにおいしい料理を提供しています。それとカラオケの機械、「何を歌いたいんだけど」と言ったらすぐにそれを使える。いわゆる専門的。私はこういうところが得意なんですって、だからそれを担当しています。一人何役しているんですか、と聞いてみたら一人二役がやれるようにみんなで、それでできない部分は楽しんでいただいて帰ってもらう。「いや～楽しかったね、よかったよ、また来るわ」と言っていただく。そこで自分自身のモチベーションがまた上がる。感謝されたと、感動してくれたと。「随分手入れしている森ですね」「ありがとうございますと、皆さんのおかげです」と。

ここでお話をしたかったのは、しっかりと情報を共有し、例えば、自分のまちは、自分の地域は、これだけの人数が、一生懸命してくれる人がなかなか思うように一緒にやる時間もとれない。理由はいっぱい作れます。でも、ここだけは一緒にやろうよ、これやってみようよと。できない理由を言うんじゃなくて。「いや～、国が悪い、何が悪いと言っても変わらない。自分たちで考え、どうしようか、こういうことをやってみようよと。こういうことをちょっと実践してみようよと。一つでもやってみましょうよということを是非やっていく必要性があるのではないのかなということで。情報共有と役割分担、そして、しっかりとそこで事業構想をする、と。どういうことかと言いますと、どのように、それはボランティアではなくて、ボランティア、ボランティアってそれは続かないですよね。ボランティアではなくて、どのようにそれをしっかりと。それは対価だけではないですよ。先ほど、自分のモチベーションが上がるように表彰する、なんらかの雑誌に載せる、テレビ、ラジオに取り上げられる。やっぱり余計目に頑張っている人は評価をしてくれるよね。

ここではどのように皆さんたちが働く場を作ってもらえるか、役割分担をして、どのように事業として成り立つようにしていくか、ということをご説明しました。

そこの中でも、やはり継続して行くためには、その事業が継承されていかなければならないですよね。事業継承です。地元の企業、地元の産業は大事です。私も小樽市の職員を22年間やっている中で、9年間経済部にいましたが、企業誘致を担当したこともあります。地元の企業が有利になる企業の誘致です。関係ない企業を持ってきたんでは、一緒にはやれません。しかも、誘致してきて、地元の企業と一緒に話し合う場がなければ、どんな設備なり、どんな製品なりを作る。それはどのようなときに、自分が設備投資しなくても、これちょっと一緒に組んで作ってもらえませんか、その空いている期間、その機械が空いている期間に、これちょっと一緒になって組んで自

分ところで設備投資する。すべてが、自分のところで設備投資していくのでは、「いや必要があるからどうぞご活用ください」では、なかなか厳しい。これは一緒に連携して新しい商品開発をしようよと、ということも通じて事業をしっかりと継承していく。ゆるやかに辞める、廃業するがどんどん増えてくるんでは町は弱体化します。人口4万8千人のこの町、5万人を目指しているわけですけれども、そのところでは働く場がなければ。一緒になって、これ産業クラスターと言いますが、一緒になって集積してそこで、どのように組んでいくのか。そうすると地域の中の情報が大事になります。その話をいま、この村を通じてしています。

しっかりと情報共有をできることはしていないと、すべてが単体で、個々に取り組んでいかなければならない。これもったいないです。組めるところは一緒に組もうよ、そういう考え方が必要です。

つい先日も信用金庫の幹部の皆さんと話をしました。そのときにこれから銀行が求められる、例えば信用金庫が求められる人材というのはどんな人材でしょうね。私は私の考え方があります。何かと言いますと、地域をプロデュースできる人材となっていただく必要性があります。その地域プロデュースできるような、こことここの地域。ここの会社とここの会社、一緒になってやってくれる場を作ろうという、そこは大事ですよね。何もこれは信用金庫だけの話だけではありません。行政であったり、商工会議所、商工会であったり、経済団体であったり、こういう場を作って、一緒にやれるんじゃないだろうかと。それをお話させてもらいました。

次に皆さんご存知でしょうか、沖縄の上のところに、伊江島といった島があるんです。行ったことがある方はおられますか？ここに人口4900人の村があるんです。伊江村というんですが。ここは小学校、中学校しかないですね。高校はありません。そうすると通常で考えると、高校がないということは、中学卒業して就職しない限りは、沖縄本島に高校にいくか、鹿児島なりの他の高校に入るということです。中学校を卒業して、就職しない限りは他の高校へ。そうするとこの島、この村

には高校生がいないということです。高校に行っている子はいない。夏休み、冬休み、春休み時期には帰ってきたかもしれませんが、後はいないですね。小学校、中学校しかないから、この島は、この村はダメなんだと、もし言ったとしたら、何の解決にもならないですね。そしてここは、書店が、本屋さんが一軒もありません。島から一回も出たことがない子どもがいるとすれば、インターネット上で図書館なり、書店を見ることはできても、実際にたくさんの本がならんでいる本屋さんを体験したことはありません。

思い出して欲しいんですが、中学校の修学旅行。「さあみんな、今日は待ちに待った修学旅行です。中学校のこの修学旅行を大切な思い出にするためにも、皆さんしっかりと約束を守って修学旅行に行きましょう。喜んでください。今日はこの修学旅行で、書店を見る時間が一時間あります。」、「すげ～」って言います。皆さんそうでしたか？

自分たちが知り気づく話をしましたが、如何にこういうところで恵まれているかということを実感しないと、ないものねだりをするんですね。何にもない、何々がない、だからダメなんだと。ないものねだりは。「あるもの探し」をしないんです。これがあるじゃないかと。こんなに恵まれているじゃないかと、やってみようよと。この話をいましている理由は後でお分かりになるかと思います。

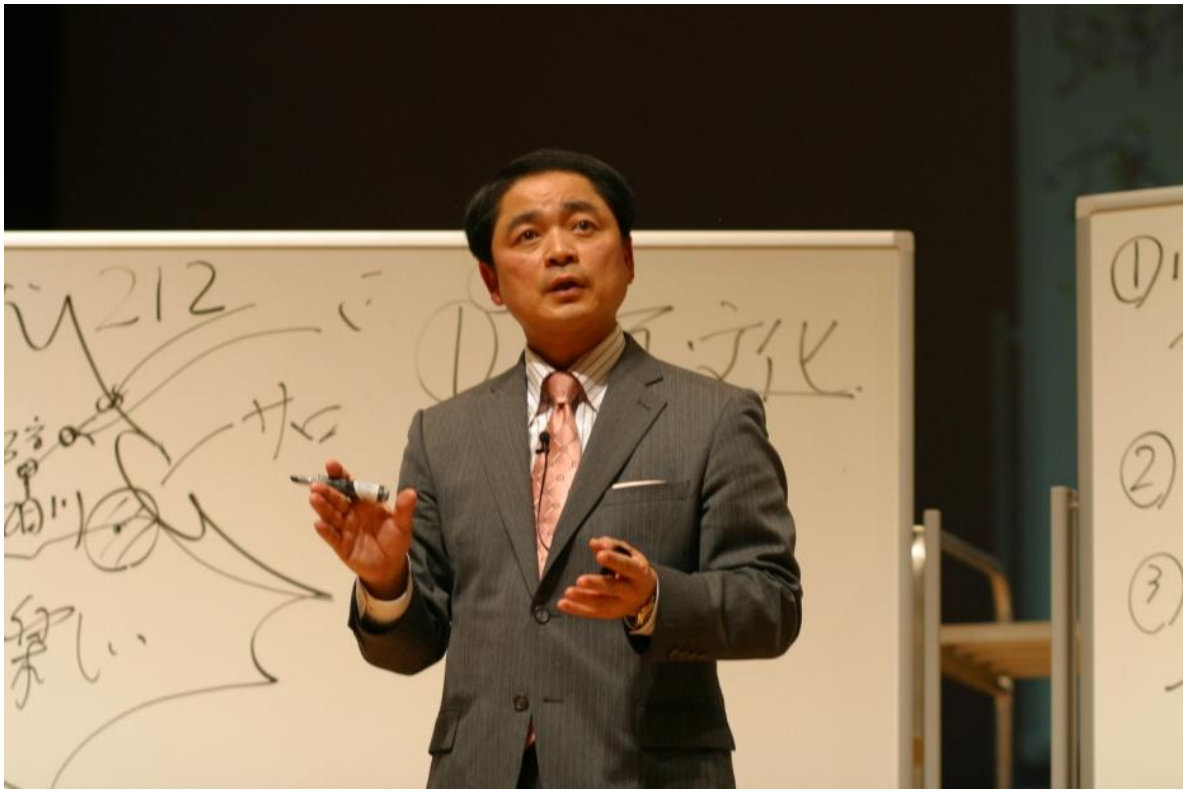
その小学校、中学校しかない、書店がないと言ったときに、だからこの島、この村はダメなんだと。そう言えば、それっきりです。

漁師の皆さんが、イカを取ってきます。これそのまま出荷したのでは関われません。地元の方が関われません。なので、地元の加工所でそのイカを加工して、地元の販売所等が中心になって一緒になって、「出口」です。売り先を探します。ここで連携をする。地域は一体感を持ってやっている。そこで商品を作った時に、せっかく小学校、中学校があるんだから、小学校、中学校のうちに一緒になって関わってもらおう。なんらかここで、汗を流してがんばっている、島を支えている人、その人たちに会う、もしくは出会う、一緒になって何等か取り組む。そういう機会を作ろうということで、中学生と沖縄県立芸術大学の学生とで組んで商品を作ったもののデザインを考えるこに関わってもらうんです。これは先ほどから何度も言っていますが、ボランティアではありません。それでは続きません。なので、その売れた売り上げの5%前後を図書購入費に充てていきます。図書館ないんです、いわゆる書店がないんですから。図書購入費一年間15万円ずつ。それでは十分な本が買えない。地域一体となって未来を担う子ども達、しっかりとそこで汗を流して頑張っている漁師の皆さん。そこで一生懸命がんばっている加工場の皆さん。その皆さんと、小学校、中学校のうちから知り合って、ちゃんと関わっていただいて、図書購入費に充てていきましょうと。

今日、JA で販売をやっているところのそれぞれのレシートを入れるとその小学校の図書購入費にあたるんですね。素晴らしいと思いました。どなたが考えたのかと、素晴らしいと思いました。いわゆる、しっかりと少しずつでも皆さんの善意で、未来を担う子ども達にそこをちゃんと伝えていく必要性はありますよね。もちろん。

そして、私は地域づくりの中で、小学校、中学校、高校の先生は大事だと思っています。特に小学校の先生は大事だと思っています。毎日接するんです子供達に。未来を担う子どもたちに毎日接しているんです。ぜひ調べていただきたいんですが、自分の地元の小学校の先生は、地

元出身なのか、出身ではないのか。どういうことかと言いますと。毎日接している子どもに、地元出身の先生なら、小さいときあそこで遊んだよな、あそこは今頃この季節だといいよな、と子どもたちに伝えられます。ですが、そこで生まれ育ったことのない、十分勉強していただいているならば別ですが、関心を持っていただけなければ、毎日接している子どもに、「この時期ではこの町ではやっぱりこれだよね」、「先生そうなの？」、とはなりません。大事です。子どもたちだけが、学ぶそういうことだけではないです。先生も皆さんも一緒になって、すべての人がここで生まれ、ここで育ったわけではない。自分のまちで生まれ育った、でも大好きでこの町に移り住んだ、でも十分知らない。それを知り、気づく、機会が大事だということをお話をしています。そこでこの伊江島、どれくらいの売り上げになったかと言いますと、「イカ墨ジューシー」、イカ墨で作ったご飯の元です。これ18ケ月で17万パック、5100万円です。売上ました。イカ墨の餃子を作りました。各種類のものを一緒になって作り上げました。全体で10種類以上作っています。金額で言うと、この伊江島、伊江村、この取り組みでどれくらいになったかというと、積み上げていきますと、3億円を突破しました。



小さな取り組みだからとか、いやいやそんなのできっこないとか、そんなのは無理だとか、いくらできない理由を話し合っても、解決にはなりません。じゃあ、どう役割分担をするか。「私はこれ得意だよ、これをやろう」、「そうだね」、と。一人に対し「どうぞ全部やってください」ではなくて、お互いに役割分担をする。でも自分たちの地域では、自分達ではできないことがあるよね、それは誰に楽しい場を作り、「これ以外と楽しいね」という場を作り、ちゃんと考えて作って関わっていただく。これすごく大事です。

次に何問か例を上げていきますが、鹿児島県鹿屋市ってここからだとそんなに遠くはないと思いますが、行ったことがあるという方おられますか？（挙手）、ありがとうございます。あそこに行っていかがでしたか？「すごいな～」とかって思いました？、あそこが特別なんだとか、あそこがこういう環境が整ってたんだとか思う方もいるかとは思いますが、私も毎年5月と11月、インターネットでも出ていますが、「ふるさと創生塾」という塾がありまして、ここに行っています。驚きましたね、最初行ったときに。何に驚いたかと言いますと、着いたのが、私が北海道から向かって、鹿児島空港で降りまして、鹿屋までバスに乗りまして、そこからタクシーに乗って30分くらいかかるんですね。それで「やねだん」という集落に到着しました。入ったのが14時だったんですね、3泊4日でやっているその中日だったんです。私が行ったのはですね。「私14時につきましたよ」って豊重哲郎さんに言って、そして「私は何時から話をしたらいいですか？」って聞いたんですね。そしたらなんて言ったと思います？「（私）14時くらいに行きますから」「はい、わかりました（豊重氏）」って言われてたんで、「それで、私は何時から講義をしたらいいですか？」って聞いたら、豊重さんが言った言葉は、「木村さんは22時からです」って。そしたら私はプラス思考ですから聞かなきゃいけないことがありますね。「何時までやっていいんですか？」って聞いたんです。そしたら「好きなだけやってください」って言われたんです。朝の5時までやりましたよ。」もう一緒になって。それで今回、5月に行くんです。5月に行きます。前段、北海道の札幌で、地域の自治体の皆さんが集まる「北海道自治体学会」の大会がありまして、そこで、基調講演で「なぜ地域はここまで汗を流しているのに、元気にならないんだ」というテーマ

で話をします。それが終わってから、羽田空港を経由で鹿児島空港に降りますから、やねだんに着くのが23時半です。そこで、やねだんに23時半に着きますと言ったら、なんて言うかなって楽しみにしているんですけれども、たぶん木村さんは午前0時からやってくださいと言うんじゃないかと思うんですね。もしくは午前1時からやってくださいと言うんじゃないかと、楽しみにしているんですけれども。まあ、朝まででしょうけど。そこで、私がなぜ行政職員になりたかったかと言うと、小学校、中学校、高校。とくに高校を卒業して大学に行くまでは、漠然となんらか、せっかく人生は一回ですから、必ず人は死にますから、人生1回の中で何をお手伝いできるだろう、ということで考えてました。大学に入って、自分でしっかり目標を立てないと、単に行政職員になりました、じゃあ何をするんですかと言った時に、これから考えますっていうんじゃ困る。いわゆるあなたが全く考えていることが分かりにくい。何故なりたいのかも言えないとなると、自分自身納得いかないので、しっかりと決めてました。産業と文化を世界に向けて発信する。産業文化を世界に向けて、例えば筑後市から、何も東京から発信しなくたって、この筑後市から発信できることがあるじゃないか、という人づくり。これはまちづくりですが、産業と文化を振興して、そこから発信できるまちづくりをしようというのと、もう一つは未来を担う子ども達です。未来を担う子ども達を「愛着心をもってもらうように育てよう」と決めていました。私は小樽市の職員だったときに、最初に配属になったのが納税課というところでした。いやあ、びっくりしましたね。面接の際に、自分自身はこういう理由で入りたいです、って強く言ってたんですね。第1面接会場でも、第2面接会場でも産業と文化を地域から世界に、小樽から世界に向けて発信できるまちづくりに、私は関わりたいと。未来を担う子ども達を地域の皆さんと一緒になって育て上げたいと。人づくり。これは是非やりたいと。行政職員になって、ぜひそれを一生涯やりたいと言ったんですね。「わかりました」、と言っていただいたんですけど、配属になったら納税課ですと。

いや～、私本業は仕事と人生と思ってなかったから、ガクンとしたんですね。プラス思考ですけど、じゃあ、本業の仕事としてできないだと。納税課というのはそれをやる仕事ですから、そこはしっかりとやる。本業の中の人生として、自分がこれをやることによってワクワクする。モチベーションがあがる。「よし、また仕事がんばろう」と、それをやると。最初にやったのは産業、歴史的建造物。これが修復をして倉庫のまま活用されなくなっているんですね。もったいないですよ。もう、名刺もってそこに行きまして、是非それはレストランをやりたいですとか、若しくはこういう経済活動をやりたい、いわゆるガラスのお店を開きたいですとか、そういう人がいたら、倉庫として活用するのではなくて、ただ修復するだけではなくて、ぜひ経済活動に使うってことを協力していただけませんかね、って言いに回るんですよね。言ってまわるんです。そうすると民間の皆さんは、そうする人がいるんであれば貸そうかって言ってくれるんですね。そして、一生懸命、日曜日とか回って、祭日の日に回って、使っていただける方を引き合わせるんですね。

「あんた、これ仕事か？」って言われたら、納税課ですから「仕事ではありません」って、ですが経済活動をやってくれたら、税金を払ってもらいます。しっかりと関われない、関係ないわけではありません。こういう理由でぜひ経済活動をしてほしい。

文化、歴史的建造物。行政が保有している歴史的建造物があります。美術館や博物館にしていけばいいんです。文化発信をしていけばいいんです。そこにぜひ使いましょうよと、学芸員の皆さんのところに言いに行きます。「是非こういう発案が必要なんじゃないですか。これから文化の香りがするまちづくりが必要なんじゃないか」と、入ったときから言っています。

じゃあ、未来を担う子どもたちに愛着心を持たせる、そういう子どもに育てると言った時に何があったかと言いますと。私驚いたんですよ。「港町、小樽」、子ども達が魚の名前がわからない。小学校5・6年生。もちろん、学校の先生、小学校の先生、それから、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、一緒に集まってきます。小学校5・6年生に100人～200人集まっていただいてもらいます。「さあ、今日は漁師の皆さんに来ていただいて、先生になっていただいて、旬の魚の話をしてもらいます。今日はおいしい魚を持ってきていただいています。最後はみんなでしっかりとごちそうになります。」と。「わーっ」ってなりますね。それでは今獲れている、この北海道小樽でとれている、みんなの地元だよね。獲れている魚は何があるかなって。答えは一斉に同じなんです。なんと言うかというと、「じゃあ、1、2の3で言ってみよう。1、2の3はい」って言ったら、「さかな～！」って言うんですね。これはショックでしたね。種類を聞いているんだよ。そしたらいきなり言うんですよ。「クジラ！」「マグロ！」って言うんですよ、本当に。いやもうこれ驚きなんですね。スーパーに行ったらいろんな種類の魚がいます。地元で獲れていなくてもあるんです。そうすると「マグロ！」って言うんですよ。それから「ハマチ」って言うんです。「違うよね、この時期はこの魚あるよね」って。そうしたら「知ってる、知ってる」って言う

んです。「はっかくでしょう」知ってるよ、これ刺身にしたり、味噌焼きにしたらおいしいよねって。これ知ってるんだと、旬の時期おいしいよねって。「じゃあ聞くよ。この魚どんな形をしているか書いて」って言ったらシーンってとなって。刺身になったり、味噌焼きの前の形は見ているんです。「じゃあどんな形です？」って聞いたらどんな形かわからないんです。味噌焼きの前の形は見てます。だけどどんな形なのか、トビウオのような魚なんです。どんな形なのか聞くとわからないんです。八角形だと思うけどわからない、ということなんですよね。地元で生まれ育って、若しくはこの町好きだよって、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、この町好きだよって来て、そのお子さん、お孫さんが、町に愛着を持つか。あなたの住んでいた町は、どんな町ですか？って。あなたの生まれ育った、そして大好きな町、この筑後市はどんな町ですか？と聞くと、「山があります、川もきれい、きれいな川が流れています。公園整備がしっかりされています。」それはいいんですけれども、それはどちらでも公園整備はされているんですよ。どういう公園なんですか、それはどういう山、どういうところなんですか、どういう川なんですか。先ほど「言い訳」とお話しました。ビジネスとは別としても自分に誇りを持てればいい。「愛着を持てるあなたのまちってどんなまちなんですか？」そこが私は大事だと思って、この目標で入りました。

その中で、鹿児島県鹿屋市、人口10万人、やねだん集落、いま320人くらい。そのやねだん集落に行ったときに。豊重さんが今から16年前、55歳の時に町内会長になった。そしてそれを聞いた時に、「目標は何だったんですか」と。いわゆる、町内会長になってくださいって言われて、「よしわかったなろう」と言った時に豊重さんの目標はなんだったんですかと言ったら、一つ目は「未来を担う子どもたちのために、この町内会でしっかりとみんなで一緒になって、一体感を持って全員野球で子どもたちを育てるんだ」と。それが一つ目の理由。二つ目は「しっかりと文化を育むんだと。」いま大切な文化、自分達が誇りと思える文化あるよね。それと併せて、今これから未来、子どもたちに伝える、しっかりと伝えていってもらう文化、作る必要性、自分達で築く必要性あ

るよね。それを誇りとしてこの集落でしっかりやっていこうよ。

この子供達と文化を大切に活動をすると、展開をすると。町内活動をすると、公民館活動をするということです。

それでお気づきになりましたでしょう。これ、いまから16年前豊重哲郎さん55歳にスタートを切った、私は28年前、産業と文化を地域から世界に向けて発信するまちづくり、未来を担う子どもたちを愛着心を持てる、そういう子どもたちに育てるために、地域づくりで子育て、いわゆる子供を育てる。これ同じなんです。やはり、しっかりと自分たちの生きざまを見て子どもたちが関わって、そして自分たちの誇りと思える産業だったり文化であったり、それを育む。これは大事だなというのを改めて、やねだんの豊重さんにお会いした時に実感したんです。これ大事だなと。やはり私がずっと考えてやってきたことというのは、同じ考え方を共有する方がいる。そこでボランティアはありえないというのは同じでした。自主財源を確保しようと。自主財源をしっかり確保しない限り、すべて補助金頼みになってしまう。別に補助金が悪いとは言ってません。補助金頼みで、なんでも補助金ないのか、何がないのか。そうではなくて、自分たちでできることは自分たちでしっかりとやろうよと。役割分担をし、情報共有。役割分担し、事業構成をする。いかに自分たちでしっかりと稼ぐ。自主財源を、町内会といえども自主財源を確保するのか。そこを考えている。ご存知のとおり、畑を最初に、この集落は借りました。借りて作ったんですね。いもを作ったんですけど。おいしくなかった。それで、土着菌を考えようとしますね。土着菌を。この集落、酪農でハエと匂いがひどくて絶えなかったんです、その苦情が。なんとかならいかと考えて、この土着菌を開発して、エサに混ぜたらハエと匂いが消えたんですね。これは売れるぞということで、土着菌販売をし、それでサツマイモと芋を作り、焼酎を作り、味噌を作り、そして自主財源を確保した。

いまから16年前というのを何度か言った理由としましては、1年・2年で出来上がったわけではないということです。16年目です。じっくりと地域の皆さんが役割分担をし、何が自分ができるかと言うことを決めて、そして全員野球、一人とも欠けることなく、いや、私は関係ないではなくて、一緒にやろう、一緒になって取り組んでこう、ということでやってきた。

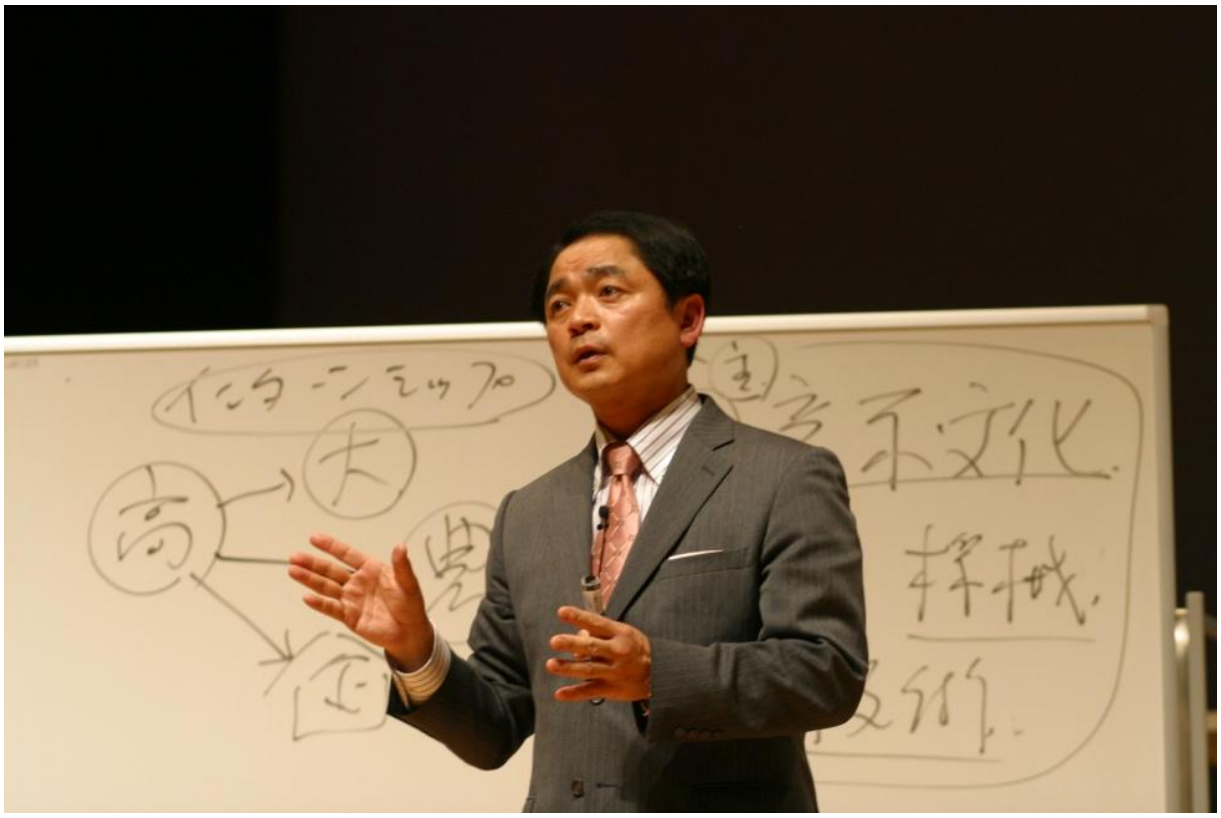
子供達のために寺子屋を開きます。学校を退官なさった先生に協力いただいて、寺子屋を作ったと。文化、いわゆる空いている民家があったらそこを借りに行って、「町内会に貸していただけませんか」と借りに行って、そこを自分たちの自主財源で修復をして、築100年～140年の建物を修復をして、そこに全国から芸術家を応募。いわゆる募集をします。我がやねだん集落、迎賓館を作りました。迎賓館を作ったんですよ。どんなにすごいのかなと思ったら、築100年～140年のを修復した。町内会で自分たちの自主財源で修復して、迎賓館と名付けてアーティストを全国から公募する。いま現在7人のアーティストとその家族、移り住んできてますよね。そうするともうお分かりだと思いますが、芸術祭を5月に始めたんです。町内会主催です。その時に小学校の皆さんにも是非来て欲しいなと思って小学校に行ったら、最初は予算がないから難しいですと、関わるのはなかなか厳しいですよって。そこで自分たちの自主財源でバスをチャーターして、送り迎えすべて町内会がバスを出しますから、ぜひ参加してもらえませんかということで、未来を担う子どもたちが芸術祭に参加するようにしたんです。町内会が小学校と連携して、7人のアーティスト、芸術家の中に北海道の滝川から一人来ています。こないだ私もお会いしましたけれども。

その家族もですから、それなりに人口も増えています。未来を担う子どもたちのために文化をしっかりと育んでいると。自分たちでしっかりと。

この活動を海外の特に韓国に。韓国の皆さんが注目していて、「やねだん」という居酒屋を作りたいと言いまして、第1号は出来上がっているんですね。いまやねだん第2号の居酒屋がちゃくちゃくと準備が始まってますね。そうすると通常難しいよと酒を販売するのは、海外とやるのは。町内会が1300本～1500本、焼酎を海外に輸出しています。そこでこの話をした理由がもう一つありまして、じゃあ見に行こうと言って、やねだん集落の皆さん20人で韓国に行ってます。その時に居酒屋については、いや～ありがとう、そういうのを作っていただいて、私どもの一生懸命作った芋で焼酎を作って飲んでいただいて、おいしいおいしいと飲んでいただく。こちらもモチベーションがあがります、ありがとうと。ところが公園に行ったんですよ、公園に。公園に行きますと、韓国ですよ。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんを大切にしなきゃ。お子さん、お孫さん、しっかりと教育されています。

大切なのは、お父さんであり、お母さんであり、おじいちゃんであり、おばあちゃんだよと。やねだんの人たちが公園に行ったら、一生懸命、子供達、孫たちが、じいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんのリハビリを手伝ってます。「がんばって、もう少しで元気になるから。もう少しで足が動くようになるからね。手が動くようになるからね。」と一生懸命汗を流しながら、手伝って

いるんですよ。もう、涙ですよ。それを見たときに「これだと」。ぜひ自分たちの公園にこの器具を持って行って、手が不自由になった、足が不自由になった、リハビリが必要だと。おじいちゃんがんばって、おばあちゃんがんばってと。子ども達しっかりと、孫たちしっかりと、やれる場を作ろうと。本来だったら戻ってきて「あの施設よかったから行政なんとかしてくれないか」と。そうじゃないんですよ、自分たちで自主財源を確保して、自分たちでできることは自分たちでやろうって整備を始めた。実際にもう完成している。それを私見たときに、本当に全国各地、もちろん、これを設計しこう言う事をやろうとしたときに、この支援がないだろうか。いろんな支援の制度、メニューがあります。でもそれに頼り切ってしまいますと次が続かなくなります。自分たちはこれをどのように情報共有して役割分担して、しっかりと継続させ、進化させていけるのか、ということを考えませんと。やはり考えて行きませんと、誰かが考えてくれることはないと。自分たちで考えていかないと。自分たちでできない理由を作るんじゃなくて、しっかりとこうやってみようよと。ここまでなら私でもできる、私ならできるよねというところを一つずつ。もう早急に。1年でできないなら、2年でやる。そうじゃないという話をしたいがためにこの話をしています。5年でやってみよう、もう少しじっくりやってみよう、ときにはここはこういう風にもう少しやった方がいいんじゃないか。もう1回考えて、こういう風にやってみようということをやっていきませんと、なかなか一体感を持って、一緒になってやろうということにはならなりません。最後にあと5分話をしてから。



最後に私は、よく映画を見に行くんですよね。映画を見に行きます。皆さんも映画は大好きだとかいう方もいると思います。歌舞伎、能、狂言、大好きですんで、時間があれば見に行っています。ちょっと空き時間があったりしたらですね、この間は「カーズ」に行ったんです。「カーズ」といって車がしゃべるんですよ。マンガなんですね。時間の合間ですから、スーツ着て行ったんですね。そしたら周りはお子さん連れの家族なんですね。「あのおじちゃんに近づいたらだめよ」って。

わかりますよね、スーツ姿で行っていますから。随分変だなと思うんですね。そしたら私の方を見てるんですよ、皆さんが。いえいえどうぞ前を見てくださいと。それでこの「カーズ」。ものの見方の話です。どのようにものを見るか。この「カーズ」は車がしゃべるんですが、レースに出ていて、途中からレースから外れちゃうんです。コースから外れちゃうんです。外れたんで別の街に行っちゃうんです。そこで何でこうなっちゃたんだなんて暴れるんです。街を破壊しちゃうんです。それで、街をしっかり作り直しなさいと、そこをやんなさい、でないとここを出さないと言うんですね。これまちづくりなんですよ。

この間、「マネーボール」という映画を見てます。野球の好きな方は沢山おられると思いますが、「球団は予算がないと弱いのか」と。あの北海道に行きますと「ダルビッシュ」、海外で私は活躍していただきたいと思います。「なんでいっちゃうんだ」という人もいます。でも活躍いただきたいと思います。となると、予算の20億で来てください、30億で来てくださいと言うところが、所詮、チームとして強いのかと。

自治体で「予算がない」、しょせん予算がないから駄目なのかと。これ見方によるとこのマネーボールという野球の映画なんです。「本当にそうなんだろうか」と。例えば、バッターボックスに立って、必ずファーボールを選んで塁にでる。でも打ってるわけではありません。そのお金のある、予算のある球団は、できれば打てるバッターが欲しいなと。これどっかに移ってもらえないかなと。年俸もその方は低いです。打てないんです。でもファーボールを選んで塁には出ているんです。塁に出る率が非常に高いです。これ何を言いたいかと言いますと、ここで情報共有と役割分担をした際に、しっかりとまちを分析しないといけないということです。となりますと、確かに打てないけれど、うちの球団には予算ないけれど、その人に来てもらって塁には出てくれるぞと。監督が行くわけです、この映画の中で監督が行くわけです。しっかりファーボールを選んで塁に出てくれて、あなたの塁に出ている率は？分析してみます。塁に出る率は他ではないくらいの率で、しっかりと一塁ベースを踏んでいます。うちはそんなに予算がないかもしれないけれども、すぐ活躍したい。是非うちの球団に来てほしい。監督が会いに行くわけです。これは、相手はジーンときますよ。いろんな見方があります。何らかのものを見たとき。「ああ、そういう見方があるのか」と。この「マネーボール」では「予算がないから駄目なんだと」いうことではないです。しっかりと勝ち抜いていく、その球団を。それぞれの人の得て不得手あります。そこをしっかりとまちづくりの中で、生かしていくと。いや私はここが弱いんだと。いやいや、それはこの方と一緒になって大丈夫だよ、って。やれるよねって。こうやっておこうよ。今年これやってみようよ。そこが実現できると。一つの、映画一つをとりましても、見方によって、随分と「ああ、学ぶことがあるな」ということをいつも実感するんですね。

各地域に行って、どんなまちづくりをするべきですかと、こないだ驚いたことがあるんです。「木村さんに設計を全部任せます」って。いや驚きましたね。それでこの話をしたんですよ、考えるって。しっかりと。こういう風にやるんですって言って、協力体制、応援体制をとってくださいと。必ず応援体制をとります、協力体制をとります。それはこういうやり方がありますよねとアドバイスをさせていただきます。でもそこを実現し、喜びを感じ、子供たち、孫たちに伝えていくのは皆さんたちです。私ではありません。主役は皆さんたちです。自分たちが作ってもいないものを真剣

にやる、そして子供達、孫たちに伝えようと思いますか？自分たちが作ったからこそ、自分たちが主役であるからこそ、ぜひ子供達、孫たちに伝えたい、もっと広げたい。もう少しこういう風に崩したいよね。是非そういうところを、今日を第一歩に、私は協力し、応援させていただきたい。

時間となりましたので、これをもちまして私の講演を終了させていただきます。今日、表彰を受けました皆さん、本当におめでとうございます。そして、これからしっかりと連携をして、「出来ないんではなくて、こういう風にやってみよう。できる。ここは出来るよね」ということを、共に取り組んでいくことを。それと「頑張ってください。がんばりましょう」と。「一緒になってやっていきましょう」ということで、私の講演とさせていただきます。本日はありがとうございました。